

---

# 玖刻回顧録《参》～渡廊下之葵手～

灯流 昼行灯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

玖刻回顧録《参》〜渡廊下之葵手〜

### 【Nコード】

N9138G

### 【作者名】

灯流 昼行灯

### 【あらすじ】

無事完結！ 一日のアクセス数200突破 時は平成、魔都玖刻。これは「学校法人私立常平学園所属部活動・現象研究会」の軌跡を追憶する物語。今作では「玖刻七不思議」が一つ「渡り廊下の葵の手」に挑む。「現象研究会」その筆頭である間黙雷は、現象の正体を突き止めることが出来るのか。「出逢之白昼夢」、「大階段之野獣」に続く「回顧録」第三弾！！ アクセス数増加中。2400HIT突破！ありがとうございます> ( ) <

## Review・1：軋り啼く夜。

夜の静寂が 玖刻きゅうこく 市、 学校法人私立常平学園やひらひら を包む中、宿直の警備員の足音だけがやけに大きく、響いて聞こえていた。

こつ こつ

足音が木霊し、壁に床に天井に当たり、反響する。

警備員は懐中電灯を手に、学舎内の戸締まりがしっかりしているか、不審者がいないかを確認して回る。

こつ こつ こつ

何棟もある学舎内を確認し終わると、次は共用施設だ。

各部の部室が収まっている部室棟の中を見て回り、レトロな造りの学園図書館内の戸締まりを確認し、最後に体育館を目指す。

この学園は主に中等部が使用する第一体育館と、主に高等部が使用する第二体育館の、二つの体育館があった。

第一に向かい、異常がないかチェック。特に変わった所は見られない。

大丈夫。

警備員は第二へ進む。

こつ こつ こつ こつ

到着。

外から見たところ、異常は見られない。

扉の鍵もかかっているし、二階にある窓もちゃんと閉まっているよ

うだし、大丈

ぎしり……

「!？」

警備員は己の耳を疑った。

体育館の中から、物音が聞こえたような気がしたからだ。

ぎしり。

「……………」

どうやら、幻聴ではないようだ。

何かが軋むような音が、確かに聞こえてくる。

警備員は意を決して、マスターキーで扉の鍵を開ける。

鍵は差し込んだまま、扉を開け放った。

「誰かッ、誰かいるのか…！」

懐中電灯で周囲を照らしながら、警備員は叫ぶ。

もしかすると、生徒の誰かが閉じ込められているのかもしれない。

ぎしり ぎしり ぎしり

が、空しくも警備員の声に反応するものは居らず。

音は、どうやら頭上から聞こえているようだ。

しかも次第に重なり、大きくなっている。

まさか。

天井に据え付けられた照明類が外れかかっているのだろうか。

それならば一大事である。

ぎぎぎ　ぎぎぎ　ぎぎ　ぎぎ　ぎぎ　ぎぎ

警備員は、恐る恐る懐中電灯と共に、視線を上に向ける。

「…ッ!？」

電灯の明かりが天井を照らし出した瞬間、警備員の表情が凍りつき、次第に驚愕のそれへと変わっていった。何故なら、そこには。

ロープで首を吊った、見たことも無い制服の女生徒の死体がゆらゆらと揺れていたからである。

しかも、天井を覆い尽くすように、ぎっしり（、、、、）と。

ぎしり、というあの音は、数多の首吊り死体が同じ感覚で揺れるときに発せられたものだったのだ。

警備員の手から、懐中電灯が離れる。

電灯は床に激しい物音を立てて落下すると、自らの役目を終えたように光を失った。

されど、揺れる首吊り死体は消えることなく、二階の窓から差し込む冷徹な月光により、さらにおどろおどろしく、鮮明に浮かび上がる。

「……!!」

警備員の、声にならない叫びは、

死体を吊るすロープの、

軋む音を隠すことは、

出来なかった。

ぎしり

ぎしり

ぎしり

軋音は、

玖刻の夜に、

飲まれて、

消えて往く

**Review・1：軋り啼く夜。（後書き）**

はじめましての方も、そうでない方も、どうもです。  
お待たせしました、昼行灯です。

回顧録第三弾、満を持してお送りいたします。  
最後までお付き合いいただければ、幸いです。

## Review・2：依頼主の元へ。

新学年になってから　つまり高等部二年に進級してから　最初の月。

そのとある日曜日。

オレ　間はなゆかり　黙雷もくらいが所属する、怪異現象を探求・解明する事により知識・見聞を深める事を目的とした、摩訶不思議で奇想天外奇天烈な部活動　現象研究会　の一行は、まだ肌寒い春風を浴びながら、惠陀光駅えだみつ、正確に言えばその駅前にある喫茶店　都　を指していた。

大西おおにし　義彦部長よしひこが言うには相談事、要するに依頼を受けたいらしい。

「部長、今回はどんなアレで？」

眼鏡をかけた、博識な青年に尋ねる。

「うむ…すまないが私にも良く分からなくてね。相談を持ちかけられた際に二、三質問を試してみたんだが、要領の悪い答えばかりだね。だから、こうして外部に話し合いの場を設けたわけなのだよ」

「……よほど、公にはしたくないのかしら？」

凜とした雰囲気を漂わせ、キリツとした眉、アーモンド形の瞳を持つ、オレと同学年同クラスの女生徒、綾瀬あやせ　理沙りさが、部長の話を聞き、不満げにつぶやく。

「私たちと関わることを、他の生徒に知られたくないんじゃないんですか？」

そのつぶやきに対してか、今年、中等部から高等部に上がってきて、現研（現象研究会の略名のことだ）に入部した葛木姉弟かつらぎきょうだい、あっけからんとした性格を持つ姉の瑠奈るなが言う。

「ま、オレらは、端から見たら異質な存在だからなあ」

ルナの一言とオレの返しに、皆は苦笑気味だ。

「ぶ、部長。誰からの依頼なんですか？」

話を变えるように、葛木 太陽たいよう、弟のサン（あだ名だ）が口を開く。

「誰から、というより今回は団体から、と言った方が良いな。演劇部からだよ」

常平学園高等部所属演劇部 は、学園創立当初から存在している古株で、そのレベルは演劇の全国大会に毎年名を連ねるほどのものだだと聞く。

そりゃ確かにメンツが気にもなるよな、とそう思いながら、オレたちは目の前に見えてきた 都 へと歩みを進めた

**Review・2：依頼主の元へ。（後書き）**

この話は、文章が詰まってどうも読みにくい）・・・・・）  
作者の稚拙さです。

どうか、ご勘弁ください。

### Review・3：不吉へ誘うティータイム。

アンティークな雰囲気がい、コーヒーの芳しい香りが鼻腔をくすぐる店内で、演劇部の代表は待っていた。

丸っこい眼鏡をかけ、黒髪を後ろで束ねた少女。

肩書き。演劇部七代目部長、高等部二年。

たにもと  
谷本 かおり  
香織。

茶髪を短く切り揃え、清潔感漂う少年

肩書き。演劇部七代目副部長、高等部二年。

たけがわ  
竹川 そういち  
聡一。

どうやら相手は本気らしい。

本当にオレ等とあまり関わりを持ちたくないと思っているのなら、組織でトップの者たちが来るなんてことは無いはずだよな。

それぞれ一通りの自己紹介を簡潔に済ませる。

それから

本題に入ることにする。

「さて、こうして一席設けたわけなのだが。相談事が一体何なのか我々にお聞かせ願えるかな？」

部長が、眼鏡の奥の慧眼をすぼめるのを見やる。

今回は話を黙って聞く立場でしょう。

そう決意して、ここ 都 の名物であるオリジナルブレンドのブラスクを啜る。

専門家じゃないので詳しくは分からないが、ひきたてらしく、とて

も美味かった。

「はい……今回、私たちが 現象研究会 さんたちに調べて頂きたいのは、第二体育館で起こっている 名無しの怪 というものです」

谷本さんが 嫌な思い出でもあるのだろうか 苦々しい表情で答える。

「ナナシの…カイ？」

聞いたことも無い名に、オレはコーヒー啜る手を止め、首を傾げる。ちらりと横のテーブルの綾瀬たちを見てみたが、彼女等も知らないらしく首を横に振っている。

「そうです。最近、第二を部活動で使用している生徒間で広まっている話で」

竹川君が答える。

「それは、どういう？」

部長が、問う。

「現象 の一つで、夜、第二体育館でロープが軋むような音がして、天井を見上げると、そこには女の首吊り死体がまるで振り子のように揺れているんです。それも沢山」

否が応でも、頭にイメージが浮かんだ。

第二の天井に、たわわに実り、ぎしぎしりと揺れ繁る数多の禁断の果実。

気持ちの良い光景じゃないな。

「……それと君たちに何の関係がある？体育館を使用する人々に

頼まれてきたのかい？」

部長が手を組み、冷徹とも思える発言をする。  
調べるのは前提だろう。

彼女らの意思を、依頼を受けるのに値するのかどうかを試している。  
そういったところだろう。

「私たちも、見たんです……」

部長の視線を避け、俯きがちになりながら谷本さんは話し始めた

**Review・3：不吉へ誘うティータイム。（後書き）**

今回は、依頼という形で話が進むようですね。

短い区切りで進めているので、話の全容は捉えづらいかと思います。

辛抱して、お付き合いください。――（ ）<

## Review・4：承諾するは災厄。

「初めて見たのは一週間前」

紡がれる言葉。

「私たちが、市内のホールで行う定期公演の劇の通し稽古をしていた時のことです。小道具や照明、立ち位置や舞台音楽の打ち合わせなどをして夜遅くなつた頃」

「それは、何時くらいに……？」

「他の部活がもういなくなつて、僕たちだけだったから……確か午後十時は回つていたと思います」

竹川君が答える。

続けて、と部長が先を促した。

再び、谷本さんが喋り始めた。

「それで、ステージでの演技指導に加え、照明の暗転のタイミングの練習もしていたんです。あ、はい。体育館のライトは消していました。ステージライトとスポットライトだけです。はい、そうです。照明を両方とも落とした時、些細ですが音がしたんです。ぎし、ぎし、って」

そこで言葉を切る。

谷本さんは、肩の震えを抑えるように、手で己を抱きしめる。

「竹川君」

部長が姿勢を崩さず、竹川君に続きを話すよう頼む。

竹川君は、横にいる谷本さんを心配そうに見やった後、おずおずと話し始めた。

「その、何かが軋むような音は、体育館にいた演劇部全員が聞こえていたようなので、谷本部長が、スポットの照明係に天井を照らすよう言ったんです。…そしたら、その、天井には…名無しの

怪が」

そこにいた、って訳か。

大体、事件の様相は飲み込めた。

早く、夜遅くまで練習を続けたいのだが、その名無しの怪とやらのせいで無理。

といったことか。

オレは、コーヒーを啜りながら、部長の方を見やる。

「……ふむ、分かった。それで、だ。君たちは我々に何をしてほしいのかな？」

恐らく照り返しであろうが、キラリと部長の眼鏡が輝いたような気がした。

「そ、そんなの決まっているじゃないですか」  
谷本さんが顔を上げる。

「彼女たちを救ってあげてください」

揺るがない表情。

その真摯な瞳は部長をひたと見据える。

…は、合格だろ、こりゃ。

部長の表情が緩む。

彼は、谷本さんが「退治してくれ」だと言っていたのならば、断っていただろう。

「そういうことなら。我々に任せてくれたまえ」

部長が、冷えきったコーヒーを片手に、そう言った。

「明日、そちらの部室に伺うことにするよ。今日のところはお引き取りになってもらっても結構だ」

部長の言葉に、二人は顔を輝かせ、何度もお礼を言いながら、すっかり自分の飲み物の料金を支払い、都を出て行った。

**Review・4：承諾するは災厄。（後書き）**

次話より、ようやく本編スタートの様相を呈してきました。

更新遅れて申し訳ありません>（| | |）<

色々和多忙の時期でありまして（苦笑）

どうか、見捨てないでくださいね（^^）

## Review・5：話す現象研究会。

「ふう」

「お疲れです部長」

「何、たいしたことはない」

オレと部長は一息つく。

それから、横のテーブルで待機して話を聞いていた綾瀬、葛木姉弟の方を向いた。

「今回も大変なことになりそうね、間君」

オレンジペコのミルクティーを傾けながら苦笑する綾瀬に、オレはまあどうにかなるさ、と答えた。

それが、オレたちだろ？

「……だが、今回はあまりにも情報が少なすぎる。具象化したばかりの現象を相手にするのは、いささかきついかもしれないな」  
眼鏡を外し、眉間を揉みながら部長がぼやく。

……うん、まあ、確かに。

名無しの怪の通り、名前からもさっぱり全貌を掴むことが出来ない。

何が具象原因なのかもよく分からない。

「私たち、クラスのみんなに聞いてみます」

ホットミルクを美味しくそうに飲んでいたルナが声を発する。

その発言に、アールグレイをちびちびと飲んでいたサンもうんうんと頷いている。

ルナとサンは中等部上がり　オレらと違い中等部から常平の生徒だったわけだ　のため、交友関係は桁違いのはず。

頼もしい情報網である。

「うむ、頼んだよ」

さて、オレたちもそろそろ出るか、となったその時。

「君たち、常平学園の生徒さんよね？」

声がかけられた。

声のした方　カウンターの奥を振り向くと、そこにはこの店と同じく落ち着いた雰囲気を持つ妙齡の女性がいた。

オレの観察眼はあてにならないが、中々の美人だ。

「そう、ですけど」

オレは答える。

その返答に、女性はパツと表情を綻ばせ、丁度良かった！と手を合わせる。

ちよつと待つてね、と声をかけてから女性は一度奥に引つ込み、次に姿を現すと、その手には小包が握られていた。

「これを、常平学園高等部の保健室の藍造時あいぞうじ　創流先生そつるに渡してくれないかしら」

小包からは、ほのかに紅茶葉の匂いが漂ってきた。

ああ、先生がいつも飲んでるやつはこのなんだな、とオレは直感した。

「それと、次ちゃん取りに来なかったらもう用意してあげないから、と相沢さんが言っていたと言伝してちょうだい」

「……まかせといてください」

オレはつい、にやけながら返事をしてしまう。

まさか、あの先生にも女がいたとはね。

「ありがとう。みんなの分は私の奢りにしておくわ。是非またいらしてね」

おお、得したとそれぞれが心の中で思いながらオレたちは　都　を　後にした。

これからの数日が、

恐ろしいものになるとは、

露も知らずに　。

**R e v i e w ・ 5 ・ 話す現象研究会。（後書き）**

うおう、まだ序章は終了していなかった（^| ^ ;）  
けれどご安心を。

お待たせしました感たっぷり（笑）

次回からは、確かに本編突入です。

こうご期待あれ！

## Review・6：いざ部室へ。

都 で会談を行った翌日。

つまり、月曜日。ブルーマンデー

その放課後。

オレたち現研は、一度部室に集まり、それから演劇部の部室に向かうことにした。

時刻はまだ五時を過ぎたぐらいだ、第二体育館には他の部活もいた。バレーやバスケットなどの運動部たちだ。

あゝ、ちなみに卓球やバドミントン、体操部などは多目的棟や市内にそれぞれ専用の施設を持っていたりする。

おほん。

話を元に戻すことにする。

コート内を所狭しと駆け回るバスケット部員と、声を張り上げてラリーをしているバレー部員たちの邪魔にならないように隅を歩き、二階に向かうことにする。

第二の二階、入り口から見て右側の隅にある扉を叩く。

そこが演劇部の部室である。

はい、と顔を出した女子に、谷本さんはいるかな？と部長が問う。

あ、待ってて下さい、とその子が顔を引っ込めてすぐ、谷本さんが姿を現した。

「ようこそ皆さん。どうぞ、お入りになって下さい」

谷本さんに薦められるがままに、オレらは演劇部の部室へと足を踏み入れた。

現研の無機質な部室のおよそ三倍、いやそれ以上の広さを持つ部屋に数十人の生徒が、台本を読んだり、談笑をしていたり、小道具や衣装の製作に励んでいたりと、思い思いに過ごしていた。

「この上にも部屋があるんですよ？」

キョロキョロとするオレらを面白そうに見ながら、谷本さんが言う。

曰く、製作した小道具や歴代の舞台衣装やらが納められ、物置と化しているらしい。

「それにしても、広いなあ」

羨ましげに、ルナがつぶやく。

「そんなことないですよ。数が数ですからどうにかこうにか収まっているって感じです。あ、ども」

ルナのつぶやきに返事をしながら、竹川君が入ってくる。

「お疲れ様、竹川君。交渉は成立したかしら」

「勿論ですよ、部長。前日と同様、後一時間で切り上げてくれることになりました」

彼らが言うに、名無しの怪と遭遇した夜と同じシチュエーションを作ってくれるらしい。

助かる。その方がこちらとしてもやりやすい。

「それじゃあ、皆さんはくつろいでいてくださいね？私たちは少し、劇の打ち合わせなどをしてきますので」

そう言うと谷本さんは、竹川君を含む数名の部員と、ブリーフィングルームと書かれたついたての奥へと姿を消した

**Review・6：いざ部室へ。（後書き）**

日に日に更新速度が（汗）

今週の土日が最後の文化祭なので、

そこところ、ご勘弁願います。――（ ）<

## Review・7：彼女の想い。

理沙は昨日、都を出て、現研の皆と別れた後、一人演劇部の部屋へと赴いていた。

扉を開けたのは 香織。

部室には、彼女以外、誰もいなかった。

「本音を言うとね、私にとって無事に公演できるかどうかのほうが一決問題なの」

憂える笑顔で、香織は言う。

「都で聞いていたのなら分かるかもしれないけれど、今私たちには、練習についてくれる顧問の先生がいないの」  
やはり、と理沙は思った。

都での彼女の話には大人について、校内での大人、教師のことが欠落していたのだ。

元々、顧問がいない現研の皆にはあまり気付きにくいことなのかもしれない。

「どうして、顧問が……？」

いないのだろうか。  
質問してみる。

「いることはいるのよ。とても熱心な先生がね。けど、数週間前から産休中で」

なるほど。

理沙は無言で香織を見つめる。

「だから、だからね。今回はどうしても成功させたいの」  
香織の独白は続く。

「先生がいなくてもやり遂げました、だから先生も頑張ってくださいって、成功して言ってあげたいの」

香織の頬を一筋の涙が伝う。

理沙には、黙って見つめることしか出来なかった。

「あんな、あんな 現象 に邪魔をされている暇なんか、本当は…  
ないのに…ッ！」

抑えていた感情のたがが、外れかかっているのを、理沙は感じた。  
それほどまでに、彼女は責任を感じているのだ。

「先輩……」

理沙は、自分たちが香織にとって頼みの綱であることを自覚した。  
どうしても、助けてあげなくてはならない。

「ご、ごめんなさいッ、私、すっかり取り乱しちゃって……」

「先輩」

「え？あ、はい」

「劇、成功させましょうね」

「……。……もちろん！」

**Review・7：彼女の想い。（後書き）**

文化祭一日目が終了しました（疲  
あと一日。

準備とかで更新おこなっています。  
申し訳ありません。――（<

## Review・8：部活動って楽しいね。

オレら現象研究会が演劇部の部室にやってきて、およそ一時間。

バスケ、バレーの両部員が撤収するのを確認して、演劇部は舞台リハーサルを行うため、下に降りていった。

カルガモ親子の行進よろしく、オレたちも後に続く。

体育館の照明を落とし、ステージ、そして二階からのスポットライトのみにする。

その行為だけで、館内の雰囲気から静へと一瞬で変わるのを身体で感じた。

現在の時刻は、午後六時を少し回った頃。

「それじゃあ、始めましょう……！」

演劇部の練習が始まった

全国大会常連の名は伊達じゃなかった。

半端無い。

立ち姿、音量、声の通り具合、感情移入、なりきり。

どれを取っても、高校生レベルとは思えない。

たいしたものである。

「さん、少し俯き過ぎかな。このシーンは悲しみを全面に押し出さないといけないのだけれど、それじゃあ声が遠くまで届かないよ？」

己も舞台上に立ちながら、谷本さんは、指導を行っている。

部長だけに流石だ。

「すごいナ」

「そうネ」

「こらこら。間君、綾瀬君、目が虚ろだぞ」

「これ、演劇部自作の脚本なのかなルナ？」

「聞いたところによれば、うちの文芸部的立ち位置の  
とやらの作品らしいけど」

「へえ、すごいナ」

「そうネ」

「こちらら。諸君、静かにしないか」

あーだこーだとしながらも、時は確実に過ぎて行く

時刻、午後八時。

演劇部の夕食休憩。

コンビニで買い占めてきた食べ物を広げて、皆でわいのわいのと騒  
ぎながら食べる。

オレらもそれに混ざらせてもらった。

「いや、それにしてもみなさん、すごい演技力ですな」

部長が、ツナマヨネーズのおにぎりを咀嚼しながら、そう言う。

「いえ、完成度はまだ低い方ですよ。まだまだ改善するところは一  
杯あります」

谷本さんは、ペットボトルのお茶で、使った喉を休ませながら言う。  
やっぱプロは違うな。

妥協しないんだ。

「素晴らしい心意気だね。続きも頑張って」

「もちろんですとも」

谷本さんの眩しい笑顔。

うん、輝いて見えるよ。

「みんな！練習を再開しましょうッ！」

『はい！』

夜は、暗さを増して行く

**Review・8：部活動って楽しいね。（後書き）**

文化祭終了いたしました！

これからは、なるべく元のペースで連載できるように頑張ります！

これからも、引き続きよろしく願います。」「（<

**Review・9・揺れるカウントダウン。(前書き)**

毎度毎度遅れて申し訳ありません(苦笑)  
と、とにかく、どござシ。

## Review・9：揺れるカウントダウン。

気付くと、時刻は午後十時を回ろうとしていた。

「そろそろ……か？」

部長がつぶやく。

演劇部のメンバーも、そわそわとし始めた。

先日の恐怖を再び味わおうというのだ。

無理もないだろう。

「間君」

「……天井にいるんでしょ？ちと、キツイつかね」

オレは相棒である日本刀 刀身およそ三尺の打刀を握り締めながら言う。

美しい碧色の柄巻き、沙羅樹が描き刻まれた楕円の鍔を持つこいつとは、もう一年半ほどの付き合いだ。

現象 に絡みつくこの世のしがらみを断ち切る『導具』。

それがコイツというわけだ。今回は、相手が手の届かない高さにいるので、ん？いや……

「いけるやもしれない……」

### 間流古典斬鬼術。

オレが、己の生家、神鳴寺の今は使われていない古井戸で見つけた匣はこ、その中に入っていた書物に書かれていた剣法である。

オレン家が、どういう家系かは知ったことではないが、助かる。

その書物曰く、邪を断ち鬼を斬り、混濁した魂魄を浄化したという。

今、オレはそれにアレンジを加え、有効に使用しているのである。

「何かあったら、頼むぞ」

無言で、頷く。

「綾瀬君、演劇部に通達して、照明を」

「はい」

妙な面持ちで、綾瀬は舞台に駆け寄り、谷本さんたちに話しかける。

谷本さんは一瞬怯えたような表情をしたが、すぐに決心したようでごくりと頷いた。

「照明係！私のカウントで明かりを落として！」

谷本さんの声が体育館内に響く。

「五！」

現象研究会 が、動き出す。

「四！」

皆が、緊張に包まれる。

「三！」

ぎり、と何かが軋むような音がした。

「二！」

刀の柄に、手をかける。

「一！」

皆が、息を潜めた。

「落として……ッ！」

谷本さんの一声で、全てのステージライト、スポットライトが、ガウン！と音を立てて切られる。

視界が暗転し、それと期を同じくして館内に何かの気配が、暗くなるのを待っていたかのように満ち満ちてきた。眼が薄暗闇に慣れるのを待つ。

ぎしーい

皆が、息を呑むのを聞いた。

**Review・9：揺れるカウントダウン。（後書き）**

はい、緊張のカウントダウンパートをお送りいたしました。  
あのよきな書き方で、緊張感は伝わってきますでしょうか？  
こうしたらよいのではないか、という感想いつでもお待ちしています！

闇に慣れて、瞳孔が拡張した眼を、上に向ける。

「　　っっ……！」

いた。

伝え聞いたとおりの現象が。

天井を覆い尽くすほどの、冒瀆的なまでの数の首吊り死体が、風もない体育館内でゆうらゆうらありと揺れている。

こんな景色、やはり気持ちの良いものじゃない。

まして、見るのが二回目の演劇部は尚更だろう。

悲鳴を上げないのが驚きなくらいだ。

周囲を見渡してみる。

部長はオレの横で、険しい顔で上を見上げ、綾瀬を声を上げぬよう

口を手で覆っていた。

葛木姉弟は、二人寄り添い、震えながらも上を見上げている。

演劇部は舞台の上で一塊となって震えていた。

「　　間君」

部長が、囁く。

「はい。……何か危害を加えてくるなら」

そう言い返しながら、オレは黒鞘から、相棒を引き抜いた。

刃こぼれを起こした刀身が姿を現す。

と、死体が揺れを止めた。

見えない風が止まったように。

いや、そんな悠長に構えている暇はない。

この風は危険だ

ざわ ざわ ざわ ざわ

『!』

急に首吊り死体が激しく揺れたかと思うと、次の瞬間には、無数のロープがオレたちに迫ってきていた。

「諸君、散れッ！避けるんだ……！」

部長がそう叫ぶのを聞きながら、オレは現研に迫るロープを片っ端から斬り捨てていく。

斬った後もロープはまるで生きているかのようにしばらく蠕動していた。

「間君！演劇部のところへ！」

部長の声で、演劇部の方を向く。

連中は腰を抜かしているのか、動こうともしていない。

「ちッ……！」

舌打ちして、駆け出す

「間に合えッ！」

舞台に飛び上がり、演劇部の前で仁王立ち。

肉薄するロープをすかさず一閃する。

刀身から淡い緑光が迸り、刃こぼれを補うように包んでいく。

「鈍だからって……舐めんなよ！」

後退していくロープ、更にはその奥の死体群に狙いをつける。

「間流古典斬鬼術

」

頭の中で、常識ではありえない、飛翔する斬撃を思い浮かべる。

こいつに、不可能は無い……！

「打ち摩なびけ

斬風きりかぜ！」

全力で刀を振り抜いた、その太刀風は淡い光を帯び、剣気は怒涛の

勢いで虚空を駆ける。  
放たれた輝く剣気は、逃げ惑うロープを刻み、天井に着弾する。

!!

天井から吊り下がる禁断の果実が、一斉に絶叫した。

「くう……ッ！」

導具 の力を行使したためか、奴等の怒気を孕んだ思念が、頭の中に流れ込んでくる。

鼓膜を震わせる大音響と、その衝撃に耐え切れず、思わず、膝を突く。

「は、間君ッ!?!」

誰かが、オレの名を呼ぶ。

「ラ、ライトを！誰かライトを点けてッ！」

数瞬して、バチンという音と共に、視界に光が溢れる。

同時に、名無しの怪 の気配が消え去る。

それに安心したのか、

緊張が緩んだのかは知らないが、

真に遺憾ながら、オレはここで気を失った

Review・10：禁断の果実。（後書き）

想像するだけでも恐ろしいですね、この「名無しの怪」。  
見上げたら、あんな光景が見えるなんて。

作者には、現研 は務まりそうにありません（苦笑）

## Review・11：非日常的日常のハジマリ。

名無しの怪 と遭遇した次の日。

火曜日。

その放課後。

オレたちは、現象研究会の部室にいた。

……にしても昨日は大変だった。

気を失った後、どうやらオレは皆に保健室に運んでもらったらしい。

自身は、気を失う直前のことを良く覚えていない。

霞がかかったように曖昧だった。実は、

昨日の夜の気を取り戻した後のことも良く覚えちゃあいなかった。

頭痛がひどかった。

その程度しか分からない。

本当に、忍びない気持ちでいっぱいだ。

「昨日はご苦労だった、諸君」

部長が、申し訳なさそうに言った。

「あの、演劇部はどうなつたんですか？」

苦笑しながらも、サンが聞く。

「演劇部に限らず、第二体育館を使用している部活動は、しばし第

二での活動を控えるように言っているよ。心配しないでくれたまえ」

流石、部長。

手際が良いことで。

「……あ、警備員さんとかは大丈夫なんですか？」

サンの横で話を聞いていたルナが、ふと感じた疑問を口にした。

その質問に、部長は表情を固くする。

「それは、もちろん言いくるめてあったのだが……」

どうしたのだろう。

歯切れの悪い部長は珍しい。

ん？

「あつた」？

どうして過去形なんだ？

「……何かあつたんすか？」

「うむ、それがだね、私もついさっき知ったことなのだが　どうも警備員の一人が行方不明になっているようなのだ」

『！』

驚きが、皆に走る。

思いのほか事態が深刻であることを、その警備員が行方不明ということは、暗黙のうちに告げていた。

……これはうかうかしてはいられない。

早いとこどうにかしないと、次の被害者が出てしまうのではないか。

「今日のところは、何も手出しはせずに様子見をしようと思う」

予想外の部長の一言に、オレは焦った。

「部長ッ、何を言ってるすか！そんな暇、オレたちには無いは」

「分かっているよ、間君」

部長が、オレの話を遮る。

「だからこそ、だ。情報が倒錯し、上手く収集出来ていないこの状況で、闇雲に動くのは好ましくない。足場を固めることからしなければ。違うかね……？」

正論だけに言い返せない。

まったくもって言う通りだ。

「……そうつすよね。すみません」

「いや、分かってくれたなら良いんだ」

微笑む部長に、ついオレも笑ってしまう。

こういう時こそ焦らずに、確実に。

……また部長に教えられたな。

「それでは、これから行う作業を分担しておこうか」  
部長が眼鏡を押し上げながら、皆を見回す。

「葛木君たちは、まず生徒たちへの聞き込みを。出来るだけ情報をかき集めてくれ。そして、出来れば情報源の特定も頼む」  
『はい!』

「綾瀬君は、学園図書館の文献で調査を。禁書棚の開放を頼んである。好きにしてくれ」

「わかりました」

「椿君」

「はい、大西部長」

部長のかけ声に、一人の女性が、壁をふわりと通り抜けて姿を現した。

腰まで流れる美しい黒髪、透き通るような白い肌、見に纏うは白装束。

この大和撫子の名前は、椿しほ 芙蓉ふゆ。

現象 部室棟の仄明かり の原因であった人。

今では、オレたちに協力してくれる、人畜無害の幽霊さんである。

「君は学園の、夜の見張りを頼む。どんな些細なことでも報告してくれ」

「仰せのままに」

「では、行動してくれ」

部長の一声で、それぞれが己の役割を果たすために、動き出す。

椿さんは皆に一礼をすると、幽霊らしく姿を消し、綾瀬・葛木姉弟は、静かに部室を後にした。

部長と、オレが、ポツリと取り残される。

「ぶ、部長…オレは？」

「ああ、間君は私についてきてくれたまえ」

そう言いつと、部長は席を立った。  
。

Review・11：非日常的日常のハジマリ。（後書き）

さて、ついに本腰を入れて動き始めた 現研。  
彼らの運命やいかに……。  
今回のストーリーのキーパーソンは「綾瀬」です。  
彼女の動向に注意！

## Review・12：それぞれがそれぞれに。

葛木瑠奈と太陽の姉弟は、常平学園中等部に入学した頃から、いやこの玖刻市に移り住んでから、常に怯えながら暮らしてきた。

彼らは、親族には見えない『何か』が見えていた。

それが幽霊なのか何なのかは分からない。

分かるうとしてくれる者もない。

二人の話を感じるものは、誰もいなかった。

常平の中等部に入学する頃には、そのことを他人に話すことはなくなっていた。

「狂っている」「おかしい」などと、思われたくは無かった。

しかし。

そんな二人の前に、驚くべき出会いが転がりこんできた。

現象研究会 だ。

彼らは周囲の視線を気にする事無く、己の知的欲求を満たすという

『建前』のもと、世界のために動いていた。

そんな彼らに、感銘を受けた。

憧憬の感情さえ抱いた。

それが、ある事件で、今はこうして自分たちもその一員。

誇らしくもあり、また驚きでもあった。

「皆の役に立たなくちゃ」

胸に抱いていた決意が、言葉として口からこぼれる。

瑠奈は、あややだと赤面した。

「……僕も。僕も役に立ちたい」

瑠奈は横を向く。

そこにはこれまで、そしてこれからも共に歩くだろう太陽がいる。

「行こう、ルナ」

「うん」

更なる聞き込みに向かうため、二人は歩き出した。

部長が赴いたのは、あの人がいる保健室だった。

こつこつと、白塗りの扉を、部長は丁寧にノックする。

「どーぞ」

返事を確認して、部長は扉を開けて中に入る。

ちゃっかりオレも後に続く。

「失礼します」

「ども、藍造時先生」

「……そろそろ来るんじゃないかねえかとは思ってたんだ」

オレたちの前には、一人の保健校医。

適当に切り揃えられた黒髪に、端正な顔には無精髭、フレームレスの眼鏡。

小柄な体に纏うのはヨレヨレの白衣。

彼の名前は、藍造時あいぞうじ 創流そりゅう。

常平が出来る前にあった 高天原高校たかまがはら のOB（卒業生）であり、玖刻市の不可解な現象 について深い造詣を持つ人物である。

「おう、間。身体は大丈夫か？」

先生が、本業らしい質問をしてくる。

「はい、今んところは」

「そうか。なら一安心だ。まあお前は現象にやられた訳じゃないからな。気を張り詰めすぎるな、ってことだ」

紅茶を美味しそうに啜り、一息置く。

「それで、だ。　　　名無しの怪　についてでも、聞きに来たのか？」

「ご名答。」

部長が、はいと頷く。

「ん〜……残念ながら、俺も良くは知らないんだ」  
「なんとも珍しい。」

先生にも知らないことがあるとは。

「なんせ現れたのがつい最近だろう？いかんせんデータが無くてな  
あ」

オレらにも紅茶を準備しようと席を立ちながら、先生は頭を掻く。

「あ、先生。お構いなく」

部長がやんわりと先生を止める。

「ん？遠慮しなくてもいいんだぞ……？」

笑う先生に、部長は言い放った。

「今から現場に行くものですから」

Review・12:それぞれがそれぞれに。(後書き)

再び、ソウル登場。

彼もサブレギュラーという存在に確立してきました(笑)

実際は、著者自身「保健室の先生」に憧れていたります。

なんていうか、色々とラク…じゃなくて楽しそうじゃないですか？

イベントは全部参加できるし(笑)

**R e v i e w ・ 1 3 ・ 三 人 だ け 。 ( 前 書 き )**

試験期間が終了しました。

これより更新再開いたします！

Review・13：三人だけ。

午後六時。

オレは、部長、そして部長の目論見通りについてきた藍造時先生の三人で、第二体育館に訪れていた。普段は、運動部などで賑やかな体育館だが、今日はひっそりと静まり返っている。

閉じられてどこまでも静謐な館内は、現実空間とは切り離されたような気配。良く言えば神秘的な、悪く言えば禍々しい雰囲気を出していた。

「おうおう、こりやまた……」

キヨロキヨロと辺りを見回す先生。

その手には煙草らしき物が握られて……ん、タバコ？

「……先生、常平は敷地内禁煙つすよ？」

「ん？ああ。こりや煙草じゃねエよ」

どういう意味だそれは。

言い訳か？

「吸引薬だ。ほら、匂いが違うだろう？」

先生が、煙立つ煙草を差し出してきた。

「……む」

確かに違う。

煙草の、あの息苦しい臭いではない。

気持ちが安らぐような、心地良い匂いだ。

強いて言うなら、ハーブ類のそれだろうか。

「近いぜ間。これは数種類の香草といくつかの紅茶葉をブレンドして巻いてあるんだ。んまア気休めさ。大目に見てくれ」

「……間君。今は 名無しの怪 の解明が先決だよ」

あ、そうだった。

煙草どこのどこの言っている場合じゃないな。

早いところ何か証拠を掴まなければ。

「三人もいるんだ、別れて捜そう。小さなことでも報告。よし、では早速始めよう」

「了解ッす」

「俺に任せとけい」

こうして。

第二体育館で、三人だけの搜索劇が幕を開けた

**R e v i e w ・ 1 3 : 三人だけ。(後書き)**

どうも皆様、遅れて申し訳ありませんでした( ^ | ^ ; )  
これより、本格的に 現研 が動き出しましたね。

真相に近づくほど、事象とは危険なものです。

さて、どうなるのでしょうか？

次回をお楽しみに！

## Review・14：闇迫り寄りて包囲。

赤レンガで外装を覆うレトロな建築物。アーキテクト

常平学園付属図書館。

その四階。

普段は、何人も立ち入ることが禁じられている禁書保管室。そこに理沙の姿はあった。

保管室に備え付けられている情報端末で、今回の事象に関連しているような文献を検索し、実際に読んでみる。

ひたすらその作業の繰り返し。

まだ寒さ残る春。

外は、すっかり暗くなっている。

そして現在。

午後七時を少し過ぎた頃。

黙雷たちと別れて、ゆうに二時間が経過していた。

理沙は、平凡というものがあまり好きではなかった。

どうせ一度きりの人生だ。

楽しく、オリジナリティ溢れる、他人とは一線を画した特別なものでありたい。

だからこそ。

当然の如く人一倍の勉強をしたし、この怪しい部活にも入ったのだ。それが今……この部活は自分でも驚くほどにかけがえの無いものになっている。

理沙は苦笑しながらも、一人書物に目を通していく。

パーソナリティの一つにでもなるだろうと思いついた部活が、現在一番大事で、彼らと過ごす時間は輝く宝物のよう。

これはもう断言できる。

私はこの部活を辞めることなど出来ない。

……失念したと笑うしかない。

キーボードを打ち込んだり、パラパラと本のページを捲る音だけが既に閉館時間を過ぎ、人の気配が消え失せた図書館で、途切れる事無く続く。

未だ有力な情報が見つかっていない。

時間だけが刻々と過ぎていく。

「一人を隠すくらい力があるって事は 七不思議 何かかなのかな……」

七不思議。

それは玖刻市内で最も害のあるものをピックアップしたもの。

純粹にカテゴライズされたもので、七つ全て知ると呪われるとか言う類ではない。

「えっと……私たちが片付けて、新たにランクインしたものを含め、今の 七不思議 は ……」

- ・ 『虚公園の汽笛』
- ・ 『エントランスの柱時計』
- ・ 『雄獅子姿の髑髏』
- ・ 『食堂の狂い包丁』
- ・ 『深夜の夢幻回廊』
- ・ 『渡り廊下の葵の手』
- ・ 『悠久池の回遊魚』

「の、七つか。一番最初は、校外だし今回は関係は無い。最後まで、校舎内には関係を持たないし、候補として削除。二番目と四番目、そして五番目は事象と場所がはっきりと分かっているから除外するとして……三番目だって 首吊り死体 とは結びつかないし……」

となると、残りは 渡り廊下の葵の手 しかない。けれども、この現象も今回と関係があるとは考えにくい。

強いて関連性を挙げるなら、伸びてくる ロープ と 手 ぐらい  
だろうか。

「うん……」

理沙は、書き殴った現象表を見ながら、頭を抱える。

その時だった。

あの音が聞こえたのは。

ぎしり。

「!？」

身体が強張るのが、自分でも分かった。

それと同時に、周囲の薄闇が濃縮するのを感じる。

闇は凝り固まり、濃度を、粘度を、密度を増し、小型の蛍光灯スタ  
ンドの明かりだけではなんとも心細く、弱々しく感じられる。

ぎい。

「こ、この音は……」

この何かが軋むような音は。

明らかに 名無しの怪 のそれだ。

しかし、あれは第二体育館内のみでの 現象 であって、この図書  
館に関係は無いはず。

されど理沙は、自分の背後に、周囲に、吊り下がる何かの存在を確  
かに感じていた。

闇が蠕動を始め、理沙の鼓動も、恐怖のため、否応無しに高まって  
くる。

しん

音が、止んだ。

闇が、徐々に、理沙に歩み寄ってくる。

……このまま、自分も彼の警備員のように何処かに連れ去られてしまふのだろうか。

今現在、此処に具現化している 現象 は確かに 名無しの怪 だと、なると、この 現象 は第二体育館だけのものでは無いということになる。

具象範囲は、学園全土に及ぶのかもしれない。

そうなると、夜の常平に、安全な場所など、何処にも無い。この事を、伝えなければ。

部長に。

間君に。

は ぎ ざ ま く ん に

**Review・14：闇迫り寄りて包囲。（後書き）**

ついに 現研 にも被害者が!?

どうも、気になる展開ですか？昼行灯です>| | |<

こーいう展開（メンバー特定の誰かが狙われる）はシリーズでも初  
ですね。

さて、どうなることやら。

次回をお楽しみに！

## Review・15：走れあの子の元へ。

あら捜しを始めて、およそ二時間が経過した。

目下、名無しの怪の謎を紐解く物品的証拠は何も見つかっていない。

このままでは、奴らが出る時刻となってしまう。

「何にも無いなあ……」

煙草もどきを吹かしながら、先生は地べたに座りこんだ。

「諦めてはなりません先生。千里の道も一歩から、塵も積もれば山となる、ですよ」

部長が、目を皿のようにして周囲を見渡しながら言った。

「そうは言ったってなあ大西。こりゃ藁山ん中から針を探すようなもんだぞ……?」

確かに。

いや、これは「藁の山の中からある特定の藁を見つける」ような難しさだ。

現象が数多幾千と存在するこの玖刻で、何も知らないところから一つの現象の気配を、動向を探ろうとは、恐ろしいほど難しい。

ここはやはり部長の言つとおり、大変だが小さなことからコツコツとするしか、道は無い。

「それは百も承知です。それでも、我々現象研究会は諦めてはいけないのです」

部長が、強い眼差しと言葉を放つ。  
言う通りである。

オレたちがしなければ、誰がするってんだ。

「そういうことっすよ、先生」

観念して付き合ってください、と眼で言う。

「ふっ……言うようになったな。でも、ま、そういうの嫌いじゃないぜ」

先生は、くつくつと可笑しそうに笑いながら立ち上がり、盛大に煙草もどきの煙を吐く。

心地良い芳香が漂う、そんな時だった。

もう一踏ん張りするかという、そんな時だった。

「大西部長！間さん！大変です……ッ！」

白装束の裾をはためかせながら、椿さんが体育館に、壁を透過して飛び込んできた。

大分、慌てているようだ。

「一体どうした？椿君」

「が、学園付属図書館に、異様な闇が立ち籠めておりまして緊張が走る。」

「あ、綾瀬さんの気配が、無くなられましたの……！」

その伝えを聞き終わる前に、オレは、学園図書館に向けて、全力で駆け出していた。

Review・15：走れあの子の元へ。（後書き）

本編とは関係ありませんが、先日は「七夕」でしたね（^^）  
皆さんは、織姫さんと彦星君の一年に一日限りのデートをこっそり  
眺めることは出来ましたか？

昼行灯は残念ながら出来ませんでした（T|T）

しかし、ちゃんと「お願い」はしました。

「いつでも笑顔でいられますように」って。

僕の好きな歌手もこういつてます。

「楽しいから笑うんじゃなく、きつと笑うから楽しいのさ」。  
いつまでも、人生が楽しいものであれば良いなと想います。

## Review・16：闇を被う光。

「綾瀬ッ！」

バン！と扉を乱暴に開け放ち、転がるようにして室内に入り込む。場所は、学園図書館の禁書保管室。

時刻は、闇が万物を覆い終えた八時半。

椿さんの一報を受けてすぐのことである。

禁書保管室の空間は、「闇」が支配していた。

薄闇という可愛いものではない。

一寸先を見渡せないような、完璧な、「闇」。

当然、人の気配は感じられない。

「綾瀬君！」

部長が叫ぶ。

しかし、返事は無い。

いや、何か物音が

きしい

「！！」

この音は。

「何の音だ？」

体育館の一件を知らない先生だけが、プカーと煙草もどきを吹かしながら首を傾げている。

「どっちにしても、良い感じはしねえけどな」

眼鏡の奥の眼を細めながら、先生は嗤う。

その笑顔は今まで見たことも無いようなほど冷徹で、まるで感情を押し隠すために貼り付けられたようだった。

「先生、綾瀬君は……」

部長が、半ば絶望した声で先生に問う。

「心配しなくても、大丈夫だよ」

先ほどとは違う、優しい顔。

「ほら、俺が前さ、お前らに渡した物があるだろ？」

「あの水牛の角、ですか……？」

大階段の野獣の一件で先生が、オレ、部長、綾瀬部にくれた御守りである。

オレはウォレットチェーンに、部長はキーチェーンに、綾瀬は携帯に、それぞれ付けて肌身離さず持ち歩いてるはずである。

「そう、それだ。野獣タリスマンの時は、めぼしい効果が得られなかったんだが、本来あればタリスマン護符だ。角の内側には、神仏の御名が刻み込まれていて、己に害意ある現象からある程度守ってくれる。

……そう、勿論こいつらからもな」

周囲の軋む闇を見やりながら、先生は言う。

「だが、そう長くは持たない。長い間同じ現象と対峙していると、効力は薄れていくからな。早いとこ捜さねえと」

「そうですね」

「……にしても、この闇邪魔だな。間、払えるか」

「当然」

ベルトに差した黒鞘から、碧色の柄巻きを按じ、刀身をずんばらりと引き抜く。

「間流、古典斬鬼術」

オレのつぶやきに呼応するようにして、沙羅樹の描き刻まれた円鐔から淡い緑光がたちのぼり、刃こぼれを起こしている刀身を、慈しむように包んでゆく。

これが、現象を抜い、昇華させることの出来る手段。  
古からの導具だ。

そこ、どいてもらっせ。

「八雲乱れる

やくもみだ

叢雲断影」  
むらくものたちかけ

横一線に、刀を薙ぐ。

刀身の軌跡を追うようにして煌く緑光が尾をひき、垂れ籠める闇を斬り裂く。

軋む闇は厚みを失くし、急激に薄れ霧散していく。

そして、オレたちの目の前に姿を現したのは

**Review・16：闇を抜く光。（後書き）**

うーん、気になるところでできてますね！（笑）  
次回こうご期待！

話は変わりますが、暑いですね（^ー^；）  
暑がりの筆者にはエアコン必至です（苦笑）

## Review・17：ひとまず安堵。

床に倒れ伏した、綾瀬だった。

「あ、綾瀬……ッ！」

刀を鞘に納め、急いで綾瀬に駆け寄る。

「しっかりしろ！おいッ、綾瀬！！」

抱え込み、揺すったり、蒼白になった頬を軽く叩きながら、綾瀬の名を呼ぶ。

しかし。

綾瀬が意識を取り戻す気配は一向に無い。

「少しどいてな、間」

先生が、やんわりとオレをどかした。

彼がまがりなりでも、保健関係の人物だということを思い出す。

「心配すんな。大丈夫だ」

よっこらしよと、先生は綾瀬を担ぎ上げる。

「外傷も、憑かれている様子も無い。脈も安定してる。ただ気を失っているだけみたいだ」

オレと部長は、胸を撫で下ろす。

ホントに良かった。

「嗚呼、綾瀬さんは無事のようですね。良かったですわ」

壁の向こうから、椿さんが姿を現す。

「どうやら先ほどの闇のせいだ、ここまで入ることが出来なかったらしい。」

「うむ。本当に良かった」

部長が、引き攣った笑みを浮かべながら言う。

そして、急に真面目な顔になって椿さんのほうを向いた。

「椿君」

「分かっておりますわ部長。警戒度を上げて、監視は続けさせてい

たきます」

椿さんも綾瀬のことが心配だろうに、口には出さない。

「……頼む」

決まり悪そうに言う部長に微笑むと、椿さんはスツと姿を消す。己の役割を、しっかりと務めてくれるようだ。

助かる。

「私は葛木君たちを先に帰らせておくよ。間君、保健室で会おう  
部長が禁書保管室を後にする。」

「よし、俺たちも行くか。……そら、綾瀬はお前が持てよ」

「うツ……ええ!？」

綾瀬をオレに押し付けて、先生は保健室に向けて歩き始めた

Review・17:ひとまず安堵。(後書き)

おお、どうにか無事だったようですね(^ ^)

どうも、昼行灯です>|\_|(<

私事ですが、明日花火大会があります(<|\_|>)  
天気が良ければいいのですが……。

∴オチなしorz

「ベッドに寝かせてやってくれ」

「はい」

背中に担いでいた綾瀬を、慎重にベッドに降ろし、横にならせる。丁寧にシーツもかけておいた。

それからしばらく。

部長が保健室に入ってくる。

「部長、葛木姉弟は？」

「ああ、部室にいたので、ちゃんと帰らせておいたよよし、そっちは一安心だな。」

「……………綾瀬君には悪い事をしてしまった」  
部長が椅子に座り、うなだれて言った。  
それなりに責任を感じているのだろう。

「馬ッ鹿野郎、大西。トツプがへこんでどうすんだよ。……………こんな大変な時期だからこそ、しっかりしていないか」  
先生が、紅茶を渡しながら言う。

オレもありがたくいただくことにする。

美味い。

強張った身体が、ゆっくりとほぐれていく。

ふう、と大きく溜息をつき、力を抜きながらオレは口を開く。

「そつつすよ部長。しっかりしてください。オレ いや、皆だつては自分で自分の責任は取れます。この部活に入った時点で、とうに覚悟は出来てる」

「……………そう、だな」

顔を上げる部長。

「いや、すまない。もう大丈夫だ」

その面持ちには、いつもの威厳が蘇っていた。そうだ。これくらいで我らが部長が挫けるはずが無い。

「にしても、今回はまたえらい大きな奴を相手に回してるみたいだな」

煙草もどきを揉み消し、紅茶を啜る先生。

「この名無しの怪　ってのが最近現れたばかりとは、とてもじゃないが考えられない」

蛍光灯の明かりを、先生の眼鏡が鈍く反射する。

「それは私も同感です」

部長が続く。

「何か裏があると、私は見ています。……まあ、それを突き止めるのが難しいわけなのですが」

「今回はヤベエからな。俺も少し手を回しておこう」

それは助かります、と部長が言おうとしたその時。

「う、ん……」

綾瀬が、小さい声で呻き、身じろぎした。

「綾瀬……ッ！」

オレたちは、急いでベッドに駆け寄る。

綾瀬は眼を開き、オレらを確認すると、安心したように表情を綻ばせ、ゆっくりとだが上半身を起こした。

「大丈夫か？」

「身体が少しだるいけれど……うん、大丈夫」

「ふう。ともかく、無事で良かったな」

先生が笑いながら、綾瀬にも温かい紅茶を差し出す。

「ありがとうございます」

穏やかな芳香がたつ紅茶を、綾瀬は幸せそうに飲み始める。

蒼白だった顔にも、色味が戻ってきたみたいだ。

綾瀬が落ち着くのを待ってから、オレたちは何があったのかを尋ねた。

「霪がかかったように、あまりはつきりしないのだけれど……」  
おずおずとだが、綾瀬はティーカップを、両手で握りしめて話し始めた。

七不思議 に関連があるのではないかということ。

突然、部屋の闇が濃くなり始めたということ。

何かが軋むような音がして、それからはまったく記憶していないということ。

「そうか……災難だったな」

冷めた紅茶を口に運びながら、先生が言う。

「もう今日は帰った方がいいだろう」

先生が硬い声で続ける。

「綾瀬には、これを渡しておく」

先生が、ベッドから出ようとしていた綾瀬に小さな巾着のような物を渡す。

「これは……？」

「御守りみたいなもんだ。水牛の角と合わせて持ってな」

「あ、はい」

先生なりの心配なようだ。

しばらくして、オレたちは三人は、保健室を後にした。

Review・18：保健室にて。（後書き）

どうも、綾瀬が無事で何よりですね、昼行灯です>（――）<

皆さんは、日食見れましたか？

昼行灯めは、幸福にも見ることが出来ました。

90%くらいは隠れてましたね。

あとは…26年後ですか。

良いものを見せてもらいました（笑）

「間君」

校門にて。

それぞれの帰路につこうとした時、部長に呼びとめられた。  
綾瀬はというと、ふらふらと覚束ない足取りで夜の闇の中へ消えて  
いこうとしている。

「私は一人で寄らなければならぬ所がある。そこで君に頼むわけ  
だがいや決してこうすれば楽しいからと言っ訳ではないこれは部長  
命令だ良いかね？うむそれでは綾瀬君を無事家まで送り届けるよう  
に」

……………。

……は、はい？

「では」

「ちよっ、部長!？」

シユタ!と手を挙げて、走り去ってゆく眼鏡野郎。

……これは押し付けられたと解釈していいのだろうか。

「ったく、しょうがないな……………」

任された以上、放っておくわけにもいかないだろう。

あんなにふらふらしては、無事家に帰りつくかどうか心配だ。

「綾瀬」

小走りで追いつく。

「……………何？」

「家まで送ってく」

「け、け、結構よっ！……ッ！」

大声を上げて、眩暈を感じたのだろう。  
よるめいた綾瀬を支える。

「……馬ッ鹿。頼れよ。仲間だろうが」

綾瀬を解放。

歩き出す。

「間君……」

ふっ、皆まで言うな。

知ってるさ。

今のオレって、最高に決まってる。

そう言いたいんだろう？

「家への道はそっちじゃないわ」

最高に格好悪う……。

\*

理沙は無言で自宅のドアの鍵を開け、中に入った。

理沙は玖刻市のマンションに一人住まいだ。

これは、理沙が外県の出身だからである。

両親が友働きで経済的に余裕があるため、常平の寮ではなく静かな  
マンションに住むことにしたのだ。

「はあ……」

鞆をソファーに置き、着替えを持ってゆるゆると風呂場に向かう。

衣服を全て脱ぎ捨て、風呂場に入り、蛇口を捻る。

ザ　　ッ、

と適温のお湯が、理沙に降り注ぐ。

口から、長い吐息がこぼれた。  
シャワーは、理沙の身体にこびりついた疲れをゆっくりと洗い流していく。

それから、理沙はシャンプーとリンスで髪を洗い、ボディソープで適当に身体を洗った。

とやかくやるのが、今日は面倒だった。

もう一度ゆっくりとシャワーを浴びてから、風呂場を出る。

洗面所で、バスタオルを使い身体を良く拭いた後、下着を着てパジャマを羽織る。

クセがつかないように、ドライヤーで丁寧かつ手際よく髪を乾かす。すぐに寝たかった所だが、明日も学校だ。

せめて時間割でもしておこうと鞆を開けると、携帯にメールが着信していた。

なんだろうと開いてみる。

件名：「指定なし」

To：綾瀬 理沙

From：間 黙雷

本文：今日はしんどかったな、お疲れ。気をつけるよ？

簡潔なメールを見て、理沙は身体の芯が、ほんのりと温かくなったような気がした。

理沙は笑いながら、私を誰だと思っているの？と強気な返信をして携帯を閉じる。

襲われて少しは良い事もあったかな。

はにかみながら、時間割をして、理沙はベッドにもぐりこんだ

そう館単に、「こと」が終わる訳が無かった。

過敏になった神経のおかげで、私は目を覚ます。

何か、物音を聞いたような気がしたのだ。

不安になった私はベッドの中で、もぞもぞと身じろぎする。

出来ることならば、何も聞かなかったことにして、もう一度寝たい。

きしい。

だけど、正体を知っている者が、その音が聞こえているのに、すやすやと寝れるわけ無い。

ぎし ぎい……

名無しの怪。

驚くことに、この現象は、私についてきたのだ。

このままでは、危ない。

藍造時先生に貰った、二種類の御守りを握り締める。

寒い。

部屋の気温が、下がっているように感じる。

ここが、自分の部屋のように思えない。

私は、

軋み啼く夜を、

独り、怯えながら過ごした

Review '19: TRAGIC NIGHT (後書き)

どうも、昼行灯です。

先日、豪雨で学校（夏休みですが課外中）が休校になりました。  
ゲリラ豪雨ですね、ホント。  
皆さんも、気をつけてくださいね。

**R e v i e w ・ 2 0 ・ あくる日。 (前書き)**

祝・20話突破!!

この調子で頑張らせていただきます> | | | <

## Review・20:あくる日。

オレは登校してすぐに、綾瀬が学校に来ているか確認した。  
良かった。

自分の席にいる。

「綾瀬、おはよう」

声をかける。

……しかし、返事はない。

窓の外の空を眺め、ぼんやりとしてやがる。

「もしもし……綾瀬さん？」

言いながら、次はトントンと肩を叩く。

「ひっツ!？」

こりやまた珍妙な返事でこちらを振り返る綾瀬。  
その眼の下には隈。

まさか何かあったか。

「お、おおオハよう間くん」

動作がぎこちない。

「あ……ちよつと来い綾瀬」

綾瀬の手を取る。

「間君ツ!？もうすぐHR始まる」

「放つとけそんなの。授業より、命の方が大事だろ」

学生としてあるまじき言動をとりながら、オレは教室を出ようとする。

その時、中学からの友達でオレのことを良く知っているクラスメイト  
空島が、アイコンタクトで任せろといってきた。

助かる、と同じく眼で返し廊下に出る。

うん、持つべきものは友だな。

「間君ッ、一体何処に」

決まっているだろう？

あそこだよ。

って事で。

当然の如くオレらは保健室に到着した。

もちろん、部長、ルナとサンも引つ張って連れてきた。

「……お前ら、授業はどうしたよ」

まだ眠たそうに頭を掻く先生は、今のところ無視しておく。

「全員、風邪引いたんす」

「嘘つけ」

「このまま授業を受けると、死んでしまいます」

「……ハイハイ分かったよ。しょうがねエな、好きにしてろ」

先生が紅茶の準備を始めたのを確認して、オレは怪訝な表情の皆を

見直し、

「綾瀬。昨日の夜、何があった？」

単刀直入に聞いた。

「え……？ あ、いや、その」

「……話してくれるかい」

部長の目が、真剣になる。

どうやらオレの意図を汲んでくれたようだ。

「……はい」

綾瀬は観念したように一度かぶりを振り、話し始めた。

「昨日、家で 名無しの怪 に遭いました」

「ッ……やはりか」

昨日の出来事を良く知らないルナとサンは驚きで目を見開き、部長は頭を抱えた。

「昨日の事は俺が教えてやる。ルナ、サン、来い」

紅茶を片手にちよちよいと手招きする先生。

紅茶を飲んで、どうにか眠気から覚醒したようだ。

ルナとサンへの説明は、先生に任せておくことにする。

「部長、やはりってどういふことっすか？」

オレは、疑問を口にする。

「うむ、これは憶測なのだが」

その説明は、驚愕のものだった。

**Review・20:あくる日。(後書き)**

話も中盤に差し掛かってきました。

イレギュラーの中のイレギュラー 名無しの怪。

その驚きの力とは？

暑さに負けぬよう次回をお楽しみに！

## Review・21：誘導にまんまと。

オレの方を見やり、部長が切り出す。

「綾瀬君は 名無しの怪 に『感染』したのではないだろうか？」

……感染、だつて？

「現象 というのは、そもそも思想思念が具象化したものだ。思念の一欠片でも、綾瀬君に付着してしまえば、そして、具象条件を満たせば、その 現象 は体現化してしまう……」

部長の仮説に、鳥肌が立つ。

現実味がありすぎて、恐ろしいのだ。

だが、そんな事は実際に起こりうるのだろうか？

「起こらない、とも言い切れないだろう。何がおきても可笑しくは無い。まして、 伝染する現象 があってもなんら不思議ではないんだ」

その通りだ。

この世のものではない 現象 に常識摂理が通用するわけが無い。

「現象 の伝染、か。ありえなくも無い話だな」

ルナとサンに事情を説明し終えた先生が、しっかりとこつちの話を聞いていたのか、つぶやいている。

オレは一応、ルナとサンにも部長の仮説を説明しておく。

「なんて事……」

「そ、そんな事って……」

全員が、顔を見合わせる。

「綾瀬、今日のところはひとまず帰れ。言っちゃあ悪いかもしれないが、感染防止のためだ」

「……………はい」

「もちろんオレらも、なるべく人に関わらないようにしないといけない」

「ここは、先生の案に従っていたほうが良さそうだ。」

「いや、だけど、綾瀬を一人帰らせるのも」

「先生綾瀬君を一人にさせるのは大変危険ですマジで危険ですそうは思いませんか先生ねえ先生」

「それはそうだよな全くもってその通りだ大西そうそうそうだよ大西。      なんかアイデアあるか」

「現象 に対し、最も対処能力のある間君をつけることを提案します」

「……………はア？」

「よし、仕方ねえ。二人の早退届は俺に任せておけ。二人共気をつけて楽しんでこい」

最後の方の、楽しんでこいという意味が分からない。

「ぶ、部長ッ！私」

「もちろん、この一件が解決するため、綾瀬君宅に『宿泊』だぞ。いいな？」

……………どうしてこうもこの二人は楽しそうなんだよ。

今回、二人ともなんか変だぞちくしょう。

オレと綾瀬を無視して、話はトントン拍子に進んでいく。

「あー変な気起こすなよ……………？」

「起こすか！このエロ教師！！綾瀬ッ、行くぞッ！」

「え？、あ、はい！」

オレら二人は、皆の視線を無視して保健室を後にした。

「あいつら見てて面白いなあ。      からかいがあるぜ」  
からからと豪快に笑う創流。

「全くですな」

満足げな顔で頷く義彦。

「だが大西ー、中々良いアイデアだった。これなら色々都合が良  
い」

眼鏡の奥の創流の目は、真剣だ。

「二人共、わざと茶化してああさせたんですね…?」

苦笑して瑠奈が言う。

太陽もようやく理解したらしく、なんて計算高いんだ、とつぶや  
いている。

「ああして流さないと、間君はしてくれないだろうからね」

義彦が言う。

「なんて計算高いんだ…」

もう一度、太陽がつぶやいた

「面白半分でもある」

創流の言葉。

Review・21：誘導にまんまと。（後書き）

完全に茶化してますね部長と先生（笑）

黙雷と理沙はいじりがあるんでしよう。

そーゆーコトにしときましょー（フェードアウト）

## Review・22：ワイワイガヤガヤ。

「よし、授業始めるぞ」  
国語科の教師である若森が、教室に入ってくる。

「……ん？綾瀬と間がないな。欠席か？」  
若森は、クラスの誰にもなく質問する。

「二人共、飛沫感染も示唆され、高熱、頭痛、筋肉痛、下痢、嘔吐が続いて、脱水症状を呈し、重症化すると吐血、鼻出血、歯肉出血、下血などの出血症状が見られ、死に至る可能性の高い、『エボラ出血熱』です」

黙雷に言い訳を任されていた、空島がさらりと言い放つ。

「何いいいッ!?!」

クラス中が叫ぶ。

「何で!?!何で奴らは日本でエマージング・ウィルスなんかにかか  
つてるんだよッ!?!」

「原稿まだ書いてないのに〜!」

「もう飛沫感染してるのかしらッ!?!」

「CDレンタルしたままだよ!延滞は困る!?!」

「いやあ!そんなの嫌よ!誰か、嘘と言ってえ!」

「嘘です」

「オイ!?!」

……何と言うか、ノリの良いクラスだった。

「今は具合が悪くて、保健室に」  
そこで教室のドアが開き、黙雷と理沙が姿を現した。

「お前ら……大丈夫なのか？」

若森が、二人から距離を置きながら、聞く。

「大丈夫じゃないようなので早退させていただきます。詳しくは、藍造時先生に聞いてください」

鞆に荷物を詰め込みながら言う黙雷に、若森は合点の言った顔をする。

「……そうか、気をつけて帰るんだぞ」

「ども」

『ええッ!?!?』

クラス中が、再び叫ぶ。

『先生良いんですか!?!?間めっちゃ顔色良いですよッ!?!?』

『ああ、やばい締め切りに間に合わない!?!?』

『綾瀬なんか、廊下で鼻歌唄っちゃってますよ!?!?』

「死ぬなよ……間」

「はい……!?!?」

何感動的にしてんだよー!と元気なクラスメイトの声を背中に浴びながら。

黙雷と理沙は教室を後にした

**Review・22：ワイワイガヤガヤ。（後書き）**

今回はノリ96%ほどでお送りしました（笑）

こちら辺が、小休止ポイントと言ったところでしょうか。

さ、あと少しで中盤→終盤へのスパートです。

お付き合いよろしく願います。

## Review・23：気付くが遅し。

オレと綾瀬は、つい一時間ほど前に登った通学路の坂道を今度は下っていた。

「綾瀬、オレは一度家に帰って着替えとか取ってくるから」

「う、うんッ！」

……？

どうして、そこまで声が裏返っているのだろう。

「じゃあ、後でな」

「ひゃ、はい！」

今度は敬語かよ？

綾瀬の様子を不審がりながら、オレはあの町の裏の有力者がいる家へと歩き始めた。

純和風邸宅の格子戸をくぐる。

と、まず一匹のパピヨンが、尻尾を振りながらオレを出迎えてくれた。

「ただいま、ウミ」

そのパピヨン、ウミ（注・空を飛ばないものだけを指すような気がする。この注がある本の一文をもじっていることに気付いてくれる人はいるのだろうか）を引き連れながら、玄関を開けようとする。「おやア？学校はどうしたんじゃね雷坊？」

縁側から声がかかった。

素っ頓狂な声を上げたのは、一人の老翁だった。

彼の名は仲ジイ。

子供の頃から世話になっていて、今では良い相談相手になってもら

っている好々爺である。

今は彼の家に訳あって居候させてもらっている。

「ちよつと事情があつてさ」

「ほう……と、なるとそつちの類かね。ここ数日忙しいようじゃからのウ」

仲ジイが、ポカポカと暖かい太陽の日差しを気持ち良さそうに浴びながら、言う。

「ああ。一、三日は帰れないと思うから」

「あいよ。気をつけるんじゃないぞ?」

「仲ジイこそ、出番が少ないからつて、変なことすんじゃないねえぞ?」

「ひつひ、もーちろんじゃとも」

怪しい返事だなオイ。

問い詰めたい。

が、今下手をしてはいけない。

仲ジイに 名無しの怪 を感染させる訳にはいかないからな。

今日の所は我慢しておくでしょう。

そのまま二階に引き上げ、通学鞆の中から勉強道具を取り出し、変わりに着替え類を詰める。

オレの相棒である 導具 は竹刀などを納める用途に使う長袋の中に納めた。

「それにしても……外泊なんか久しぶりだな」

何故か心が浮き立つ。

こんな状況でも、友達の家泊まりに行くというものは楽しいものなのだ、と苦笑する。

「……女子の家なんて初めてだぞ?」

ぶわりと、嫌な汗が浮かんだ。

うっかりしていたが、綾瀬は、女子だ。

「マ、マジかよ

ッ!?!」

綾瀬が、変だったのも分かった気がした。

**Review・23・気付くが遅し。(後書き)**

いまさらー!?!?

はい、読者様の気持ちを代弁させていただきました。  
黙雷も鈍感ですな(笑)

## Review・24：訓戒。

どうにか落ち着きを取り戻したオレは、先日知った綾瀬の家の前にいた。

自然の多い地区に建てられた、オリーブグリーン外装の静かな雰囲気のマンション。

確かその五階、五〇二号室だったはずだ。

自動ロックセキュリティの為、玄関のドアは開かない。

仕方なく、エントランスに据え付けられたインターホンを押して、綾瀬を呼び出す。

「は、はははハイ！」

手元のスピーカーから、息の乱れた綾瀬の声がする。

あゝ、やっぱり緊張してやがんな。

オレが落ち着いていかなければ。

「オ、オレだけど……」

うお　い！！

何をどもってるんだオレは！

なんかすんげえ恥ずかしいぞちくしょうッいや断じてこれは動揺してるとかではなくて！

「い、今迎えに行くわ」

綾瀬の声が途切れ、目の前の自動ドアのロックが解除され、静かにドアが開く。

エントランスの奥は、エレベーターホールようだ。

左右にそれぞれ二基ずつのエレベーターが設置されている。

そのうちの一つが、まだボタンも押していないというのに下降してくる。

ポーンと軽やかな到着音が鳴り、エレベーターの扉が開く。

中からは

「なんでいんだよッ!？」

藍造時先生が出てきた。

「なんだとはとんだご挨拶じゃないか間。俺はお前らの邪魔をしないように今から帰ってやるうってのによ不満か違うだろ嬉しいだろー違うかー？」

綾瀬が出てくると思って少し緊張してたろ、とニヤニヤしながら先生が言う。

……ウザい。

「何しに来たんすか」  
ぶっきらぼうに聞く。

「部屋に、処置を施してたのさ」

処、置だと？

どんな……？

「これで 現象 がなくなるってタイプじゃ無い。ただそこに出た奴を、そこから一歩も外に出さないようにする閉鎖的束縛結界を敷かせてもらった」

何だと……？

「先生、それじゃあ」

「だからお前がいるんだろうが」

身体を射抜くような視線に、口が動かなくなる。

「綾瀬はお前がいれば、ほぼ無事だろう。しかしこのマンションの

住人はどうだ？ もし全員が 名無しの怪 に感染したとして、お前は一人でその人たちを護りきれぬのか？」

一言一言を噛み締める。

物事の一角しか見ていなかったオレとは違い、先生は事態の全容を見つめ、被害を最小限にするために行動していたのだ。

「綾瀬に感染した 名無しの怪 を叩くなら今夜だろうな。確実にしとめる。一片も残すんじゃないぞ？根絶しろ、徹底的に。切り刻んでやれ。いいな」

先生は、オレの横を通り過ぎ、マンションを出て行く。

「はい……！」

オレはその背中に一礼してから、いそいそとエレベーターに乗り込んだ。

Review・24：訓戒。（後書き）

先生行動が素早いですねー（笑）

実は黙雷が部屋に来るまで居座って脅かす気だったようですが、  
理沙に邪魔だ用が住んだならバイバイと追い返されたようです。

先生曰く「お邪魔虫だったか。テヘ」だそうです。

Review・25：嵐の中の静けさ。

数分後。

五〇二号室前。

改めて、オレはインターホンを押す。

しばらくして、扉が開かれる。

中から顔を覗かせたのは、今度こそ綾瀬。

「よっす」

「ど、どうぞ上がって間君」

先生との会話で無駄な緊張が解けたオレに対し、綾瀬の声にはまだ若干の緊張が見られた。

「んじゃ、お邪魔しますツと」

推定1LDKの綾瀬宅にお邪魔する。

滑らかなフローリングの廊下を抜けてリビングへ。

ベージュやブラウン、ライムやモスグリーンを基調としたインテリア。ア。

なんとも落ち着きのある部屋だ。

なんだ、てつきり女子の部屋だというとピンクとか使っているのかと覚悟していたが……。

あの綾瀬がそんなことするわけないか。

似合わない似合わない。

実際、オレの部屋とそう変わらないじゃないか。

まあ、それはさておき、だ。

オレはさっきから気になっていることがあるんだ。

「綾瀬、どうして頭にバンダナなんかつけてるんだ？」

「え？……あ！」

慌てて隠す綾瀬。

いやもう遅いから。

「掃除でもしてたのか？」

「その、えっと、まあ、ね……」

あからさまに視線を避ける。

当然か。

オレも綾瀬の立場ならそうしてる。

「あ、どうぞ座って」

綾瀬は、二人がけのソファをオレに薦め、自分はキッチンに消える。

「手の込んだもんはいらないぞ？」

一応、その背中に声をかけておく。

「分かってるわ。それに手の込んだものなんて私作れないし」

盆にクッキーと紅茶を載せてやってくる。

「藍造時先生の紅茶を飲んでから、少し凝っちゃって」

盆を机に置き、紅茶を差し出し、自分もソファに座りながら、綾瀬が言う。

「横に座らなくてもいいだろ。狭いよ」

「あッ……ご、ごめんなさい！」

急いで向かいのソファに腰掛ける。

「さつと。んじゃあ、どうするよ？学校がないと随分暇なもんだよなあ」

クッキーを摘み、ソファに沈み込む。

「そうね……特にすることも無いし。どうしましょう？」

ようやく落ち着きを取り戻した綾瀬も、小首をかしげる。

「名無しの怪をどうこうするっても、夜だしな」

今は、まだ昼だ。

次は、紅茶を飲む。

「お、美味しいな」

「本当？」

私がブレンドして入れたの、と綾瀬は顔を輝かせる。

「そりゃ凄いな。味は先生にも負けてないぜ」

嬉しい、と微笑む綾瀬。

その表情にドキリとしたことは、絶対誰にも秘密だ。

「なあ、綾瀬。お前さ、部屋綺麗に片付けてるよな」

話をそれとなく逸らす。

「え、そ、そう？」

どうしてここで挙動不審になる？

「あっちはどうなってるんだ？」

閉められたドアに手をかける。

こっちにも部屋があるんだよな。

「あ、いやそっちは……！」

綾瀬の静止も聞かず、スライドさせて扉を開ける。

「つぶ……ッ……！」

そこは、押入れの扉だった。

中から洪水の如く流れ出した荷物によって、オレは押し潰される。

「間君ッ!？」

「むぐぐ……ぐあぐ……うにゆううう」

呻くオレを、荷物の山から慌てて引っ張り出す綾瀬。

「いッてて……」

改めて、目の前の荷物の山を眺める。

ゴミ袋に詰められた衣類、鞆もろもろ、多数の書籍などなど。

さっき、挙動不審になった訳が分かった。

……こいつ、オレが来る前にここに全部押し込んだな。

「間君！こ、これには訳が……！」

赤面した綾瀬が、オレの横に立ちオロオロとしている。

「あ……いや見なかったことにしよう」

笑いながら、立ち上がる。

人間臭くて良いじゃないか。

服の埃を払いながらつぶやく。

「オレには何も隠そうとしなくて良いんだぞ？」

「……え？」

「仲間って、そんなもんじゃねえか」

目を瞑る。

「オレ、現象研究会の奴になら誰にでもこの命、預けられるよ。

綾瀬は違うか……？」

目を開くと、綾瀬はこちらを向いて微笑んでいた。

「そうね……私も、そうだわ」

**Review・25・嵐の中の静けさ。(後書き)**

綾瀬の弱点見たり!の巻ですね(^^)

人間誰しも完璧な者はいないと言っこと一つ。

実は昨日upしようと思ったのですが、寝忘れてしまいました

(笑)

申し訳ないです(^-^;)

## Review・26：二人一つの屋根の下。

夜だ。

夕食は、綾瀬の手料理だ。

コーンや角切りの人参が色鮮やかなポテトサラダ。

副菜は大きめの野菜が転がったコンソメスープ。

メインディッシュはデミグラスソースのかかったハンバーグ。

仲ジイには負けるが、中々の美味さだった。

本当に、綾瀬は何でもそつなくこなすな。

あ、いや、掃除は除いておくとして。

それから、二人で学校に行かない分の勉強をする。

休憩のときはテレビで今流行りのバラエティーを見て盛り上がり、

交代でシャワーを浴びた。

そして。

時刻は、午後十一時を回ろうとしている。

「さつて、そろそろ寝る準備すつか」

「……そうだね」

綾瀬は手を胸に当てて、不安げである。

「怖いか」

制服に腕を通し、軽くウォーミングアップをしながら綾瀬に問う。

「それは、当たり前じゃない」

「だよな。オレも怖い」

「え……？」

綾瀬が意外な顔をする。

「そりゃあ、オレだって怖しさ」

得物を、長袋から取り出す。

「だけどさ、人にはそれぞれ役割があるんだよ」

綾瀬は、黙ってこちらを見ている。

「オレってば昔から 現象 が見えててさ。けど、こいつがないと何も出来なかった」

そう言つて、刀を指す。

「オレはお前らが凄いと思ってる。オレと違い、そこまで行動できるんだから。だから、臆するな」

綾瀬の目を見る。

「オレには、お前がいるし、お前にはオレがいる。もちろん、部長だって、ルナやサン、椿さんや、藍造時先生だって」

綾瀬の心の揺れが止まった。

目が元の輝きを取り戻す。

「そう、だよな」

綾瀬が溜息をつく。

「間君に勇気付けられるなんて……私としたことが」

「なんだよ、それ」

二人して、笑う。

そして

電気が消された。

**Review・26：二人一つの屋根の下。（後書き）**

最後の会話を除けば、どこにでもいそうなカップルの風景。しかし、この二人は普通の人たちではなくて。

そう上手く行くわけには行かず。

とうとう奴が現れます。

次回、黙雷の怒り爆発。

お楽しみに。

## Review・27：唸る葬剣。

オレは得物片手に、寢室の隅にうずくまっていた。  
何故かって？

名無しの怪 にオレの存在を気付かれないようにするためだ。

寢室の隅。

そこには監造時先生が札で、人の気配を遮断し 現象 が干渉できない不可侵地帯を作っていた。

そこにオレは潜み、 名無しの怪 を待ち伏せている。

綾瀬はというと、ベッドの中で御守りを握り締めしきりにこちらを見ている。

大丈夫、とつぶやく。

そして、零時を過ぎた頃。

遂に

みしい

(来た……！)

オレと綾瀬は目を合わせる。

ぎぎ ぎぎ

闇が濃度を増し、室内の温度が急激に低下する。

「……………」

ベッドで震える綾瀬に、軋む闇が群がる。

きい きい ぎしり

闇の隙間からは、ロープが見え　いや、違う。  
ロープはあんなに白くはない。  
なんだろう、あれは？

すう

見えた。

あれは、腕だ。

死肉のような白さに変色した、いくつもの腕。  
それが、綾瀬に群がっている。

「……………！」  
こいつは、最近現れたばかりの現象では無かったのだ。  
これは、名無しの怪　なんかでは無かったのだ。

「渡り廊下の葵の手……………！」

『七不思議』が一つ。

ようやく、正体を現しやがったな。  
黒鞘から静かに、刀身を引き抜く。

刃こぼれを起こしている刀身を、淡い光が包んでいく。

「……………糞野郎が」

淡い光は、オレの激情にあわせて赤熱し始めた。

ぎしり　すう　きい　すう

「行くぞ……！」  
不可侵地帯から、飛び出る。

瞬間。

闇が、想だにしない来客にざわめいた。

散ろつとする。

「逃がさねえ！」

連続で、闇に光を叩きつけた。

修羅の如く、刀を振るう。

慈悲の気持ちを持たず、唯々冷酷に。

高速で闇に光を叩きつける。

紅蓮の斬撃は着実に闇を滅ぼしてゆく。

！！

闇から、声にならない叫びが漏れる。

それは、第二体育館で聞いたあの絶叫と同じもの。

しかし、耳など貸す事は無い。

「罪には、罰なんだよ……ッ！」

闇が光に圧され、徐々に白い腕があらわになっていく。

「これは……」

綾瀬が、ベッドの中でつぶやいた。

「間流古典斬鬼術……ッ」

だが、オレはそれにも耳を貸さず、綾瀬についた汚らわしい病原菌を討つことだけを考える。

「かんながら随神」

「

刀身が、紅の光で何倍にも伸びていく。

紫電一閃。

緑紅光の長き斬撃は、壁や家具などの現実の物質を透過し、白色の腕たち 現象 だけを確実に捕らえ、斬り刻む。

「……ユメノミハカシ夢佩刀」

神の鉄槌の如き一撃の下、技の御名をつぶやく。

こうしてオレは、綾瀬に憑いた 名無しの怪 を葬り去ることに、成功したのであった

**Review・27：唸る葬剣。（後書き）**

はい、「怒髪天を衝く」の黙雷君でした。

いや、怖い怖い（^ー^；）

ありゃマジギレですよ。

もしかしたら、あれほど怒る描写はは初かもしれませんか。

朝。

どうにか綾瀬に憑いた 名無しの怪、いや 渡り廊下の葵の手を被ったオレたちは、うはあと脱力していた。

「……………」

「……………」

二人して、ソファアに。

睡魔に打ち勝とうとして、うつらうつらとしている。

時刻は、午前十時。

学校はとうに始まっていたが登校する気にもならず、こうして二人でだれていた。

いや、まあ唯だれていた訳じゃあ無いんだ。

藍造時先生や現研のメンバーには、メールで事を伝えておいた。

そう、名無しの怪 が本当は『七不思議』の一つであったこと。

無事に、綾瀬からそれを被ったこと。

全員、驚愕と共に綾瀬の無事を喜んでいた。

今、学校ではそれぞれ奔走しているはずだ。

そう思いを馳せていると、二人の携帯に着信があった。

なんだろうと、受信ボタンを押す。

電話のようだ。

『間かッ!?!』

その声は、先生だ。

しかし、声音には焦燥を帯びている。

オレの向かいでは、綾瀬が「部長からだわ」とつぶやいている。

「どうしたんすか？」

『いいか、落ち着いて聞いてくれよ』

自身が焦りながら、先生は言う。

『渡り廊下の葵の手が、学園内に蔓延しはじめた……！』

「な……ッ……！」

瞬間、言葉を失った。

『こんな真つ昼間にもかかわらず、そこかしこで現象の具象化が起きている。火災警報器を鳴らして、どうにか生徒たちは非難させたんだが、如何せん頭の固い教師どもがな、オレを非難しようと追いかけてきやがる……ちっ、こんなことしてる場合じゃ無えのによ』

スピーカーの向こう側からは、荒い息遣い。

おそらく走って逃げまわっているのだろう。

『そこで、間。頼みがある。俺が今から言う番号、そこに電話してくれ。藍造時から、って言うって、常平に来て貰うんだ』

「は、はい。分かりました！」

『うし、じゃあまた後でな！』

電話番号を足早に言った後、先生はブツリ、と急いで通話を切った。

事態は切迫している。

「えらい事になったぞ、こりゃあ……」

「間君！急いで常平に行きましょう！」

部長と話を終えたらしい綾瀬が、蒼白な顔で叫ぶ。

オレもそうしたいところだが、まあ少し待ってくれ。

先生の頼みを実行しなければならぬ。

オレは、先生に聞いた番号を急いで押し始めた

**Review・28：緊急事態。（後書き）**

物語は起承転結でいう「転」を終えて、  
黙雷たちは「結」へ走り始めました。

ついに、学園全体を巻き込む大騒動となります。  
次回もお楽しみに！

それから、オレと綾瀬は急いで常平学園に向かった。

藍造時先生は生徒を避難させるだけではなく帰すことにしたらしい。通学路である坂道は怪訝顔の生徒でこった返していた。

流れに逆らうようにして、校門をくぐる。

「綾瀬ッ！部長に連絡を」

「分かったわ！」

「大階段」を駆けながら、オレらは周囲を見渡す。

曇天の下、常平には異様な空気が満ち満ちていた。

そして、決定的な事は。

ぎし みしい ぎぎい ぎしり

至る所から、あの軋音が聞こえることだ。

感染率が以上に高いのか、それとも 渡り廊下の葵の手 が自発的に行動を開始したのか。

「綾瀬、部長らは」

「そこよ」

綾瀬が携帯を手に、大階段の頂を指す。

そこには、確かに部長たちがいた。

藍造時先生や若森先生の姿もある。

そして、見たことも無い男性の姿も。

「あれが…」

オレが先程かけた電話の相手だろう。

「間、先輩に電話してくれて助かったよ」

大階段を上りきると、藍造時先生が笑いかけてくる。

「君が間君か」

男性が声をかけてくる。  
確かに先程の相手のようだ。

「あなたが 玖刻市 市長、不動ふどう 護まも……」

整えられた茶色の鋭髪。

英知で塗り固められたような表情。

すらりと伸びる体躯。

身に纏うは漆黒のスーツだ。

「いかにも」

そう、彼が。

数多の 現象 渦巻く玖刻市を統べる男。

不動 護その人である。

この人も藍造時先生の先輩で、高天原の卒業生らしい。

「本当に、常平を封鎖したんですか？」

綾瀬が問う。

「うむ、一時的に、だがね」

「こつもしないと、教師陣がうるさいだろうが」

藍造時先生が頭を搔く。

「流石の校長たちも市長命令となるとな」

「職権乱用だよ、これは」

不動さんが苦笑する。

「いや、仕方のないことだ」

不動さんの肩をドンマイと叩きながら、若森先生が笑う。

「そつだ。仕事はこれからだ」

藍造時先生がこちらを見る。

「俺たち大人はこれまでだ。あとは、やれるだろ？」

嗤うその顔に、ニヤリと返す。

「オレたちを誰だと思ってるんですか？」

皆を見渡す。

「天下の廻る 現象研究会 ですよ」

**Review・29：常平封鎖。（後書き）**

どんどん話が進んでますね。

終結に向けてあとは間が駆け抜けるだけです。  
皆さんも、遅れぬようついて来てくださいね。

Review・30：縛鎖因果。

そして、オレたちは、今回の事件の根源が潜む 第一渡り廊下を訪れていた。

三号校舎と四号後者を結ぶ空中回廊。

そこは昼間にもかかわらず、ガラス張りの窓から光が差し込まず、異様に暗い。

さらには、無数の何かが蠢く気配が満ちている。

「 渡り廊下の葵の手 の因果は」

部長が口を開く。

「 一人の 高天原高校 の女生徒だそうだ」

名無しの怪 の首吊り死体のあの服装は、高天原の制服だったのか。

「彼女は友達と呼べる人がいなかった。しかし、ある時一人の女子と知り合った。二人は以心伝心と言えるまでの間柄になったのだ。けれども、その友達は校内の生徒の執拗な嫌がらせに耐え切れず命を絶った……昔、この渡り廊下で」

皆が黙り込む。

いつの間にか、あの軋音も消えていた。

「その女生徒は、猛り狂った。校内にいくつものナイフと文化包丁を持ち込み、その友達を苛めた生徒を刺し殺し始めたのだ。この事件は昔の新聞にも載っている」

切なくも、苦しい話は続く。

「だが、全員殺すことは出来なかった。『いじめの根』はそこまで深く根付いていたのだ。それを悟ったその子は、友が命を絶ったこの場所で、首を括った」

誰かのすすり泣く声が聞こえる。

「その子は、死してなお生徒たちを許す事無く。……度々、その腕で奈落へと引き込んでいたようだ」

部長が語り終える。

「間君、頼めるか」  
力強く、頷く。

「こんな負の連鎖、オレが断ち切ってやる」  
静かに刀を抜く。

「ここからは、一人で行きます。部長たちは、下がっててください」  
そう言うとオレは、闇が立ち籠める渡り廊下に足を踏み出した

**Review・30：縛鎖因果。（後書き）**

悲しい原因ですね。

すさんだ現代社会にはありそうな話ですが、  
こんなことを平気で書ける自分が辛いです。

そして、とうとう三十話突破！

長々とお付き合いありがとうございます。――  
もう少し。

もう少しだけお付き合いください！

Review・31：快刀濫魔

ニクイ アノコロコロシタヤツガ

闇が、囁く。

周囲を闇に囲まれた中で独り、オレは佇んでいた。

ナゼジヤマヲスルノ

アナタシツテイルンデシヨウ

「ほっとけるか」

刀に、光が灯る。

「気持ちは分からないこともないんだ」  
正眼の構え。

「だけどよ、それは誰かを殺して良い・傷つけても良いという理由にはならない。オレたちは、理性ある人間じゃないか」  
闇が脈動する。

ぎし ウルサイ！ ぎぎ オマエナシカニコノキモチ ぎい  
ワカルモノカ！

「間流古典斬鬼術」

ぎし オマエモ ぎ シネエ！ みし

闇から飛び出てきたロープが、オレに殺到する。

「怒りに身を任せた攻撃なんて、食らわねエさ」  
光纏う日本刀を、振るう。

「 剝空はくくう」

ロープが細切れになり、地に落ちる。

ぎしぎしぎしぎしぎしぎしぎし

闇が激動する。次々とロープが飛び出してくる。

「効かねえ」

軽く薙ぐ。

それだけで、ロープは蒸発したかのように消えてしまう。  
現象の邪念が薄れているのだ。

アアアアアアアジャマヲスルナアア

耳をつんざくような絶叫。

濃密な闇が、オレに迫る。

「らしくねエぞ。女の子がそんなに取り乱すなよ」

刀から、光が迸はなる。

その光は、オレを圧殺しようとした闇を被つ。

「 終之型ついのかた」

オレは、今持ち合わせている中で最も高度な技を繰り出そうとする。  
じゃないと、こいつは目を醒まさない。

刀より創生された光は、刀の形を結んでゆく。

「 儂はかなき現うつしに泪なみだを流せ」

オレの周囲には、数多の光の刀が浮かんでいる。  
罪を悔い改めるよ、と心の中でつぶやく。

「  
夢幻・羅刀百景」

光で構成された刃が、舞う。

闇を切り裂き、中に潜む 葵の手 を刺し貫く。

それは、舞い散る花弁が空を裂くが如し。

「成仏しろよ」

オレのつぶやきの後。

闇が静かに晴れ始めた

Review・31：快刀濫魔（後書き）

技のイメージとしては某少年誌の死神マンガのとある隊長の必殺技

「千本桜」を思い浮かべてもらえればよろしいかと（笑）

モロカブリですね（汗）

## Last Review：終息。

無事、終わることが出来た。

『ありがとうございます！』

拍手喝采。

そう、演劇部の公演である。

オレらが 渡り廊下の葵の手 を昇華させたさせたおかげで、無事練習時間が取れたのだ。

ちなみに、行方不明だった警備員も無事命に別状は無い状態で発見されたらしい。

大団円である。

オレたちは公演後、演劇部のいる楽屋に訪れた。

行く途中、涙を流す一人の妊婦さんとすれ違った。

あれが、演劇部の顧問なんだろうな。

綾瀬から話を聞いていたオレらは、綻ぶ顔を抑えきれなかった。

「みなさん！」

楽屋の扉を叩くと、谷本さんが満面の笑みで迎えてくれた。

「おめでとうございます。とても素晴らしいものでしたよ」

部長が、谷本さんと握手しながら言う。

「何もかも 現象研究会 のみなさんのおかげです」

楽屋にいた演劇部全員が、頭を下げる。

うう、なんだか照れくさい。

「これからの御健闘もお祈りしています」

綾瀬が嬉しそうに言う。

「そちらこそ」

笑みで返す谷本さん。

「間君を落として見せてね…?」

谷本さんのつぶやきに、綾瀬が顔を真っ赤にして頷く。  
何を言われたのだろうか？

オレたちは、爽やかな気分を外に出た。  
ここ数日吹いていた寒い風も今日は止んでいる。  
空も、昨日までの雲が嘘のようにどこかに消え、お天道様がさんさんと日差しを振りまいている。

さあ、何をしよう。

「とりあえず、打ち上げだな」

部長が目を子供のように輝かせながら言う。

「賛成！」

ルナがはしゃぐ。

「都 にしませんか？」

サンも楽しそうだ。

「賛成よ」

綾瀬が笑う。

「じゃあ、行くか…?!」

陽気な日差しの下、

オレらは 都 に向かって、  
歩き始めた

**L a s t   R e v i e w : 終 息 。 ( 後 書 き )**

無事、終わることが出来ました。

読者の皆様、2ヶ月強という長い間。

本当にお疲れ様でした。

彼らの物語はまだまだ続く予定ですが、

ここでひとまず区切りを付けさせていただきます。

では、またお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9138g/>

---

玖刻回顧録《参》～渡廊下之葵手～

2010年10月10日01時50分発行